

今日も歴史



画像: Wikipedia を元にKRA作成

昨年 2012 年、英国レスター州の駐車場下から見つかった人骨が、プランタジネット朝／ヨーク家最後の王リチャード 3 世のものと 2 月初頭に発表された。戦場で亡くなった最後のイングランド王リチャード 3 世。評価の分かれる王である。

駐車場は、かつて修道院があったとされる場所にある。床に無造作にペンキで書かれた R の文字 (PARKING か何かの一文字なのだろう)。その下を掘り起こして 1 時間足らずで人骨が発見されたという。調査が始まり、最終的には子孫との DNA 鑑定照合でリチャード 3 世と断定された。因みに、その子孫の男性は現在ロンドンで家具作りをしているとのこと。まさに、世が世ならば、である。

リチャード 3 世は、ヨーク家とランカスター家間の薔薇戦争が始まる 3 年前、1452 年に生まれた。背骨が曲がっていたといい、また兄エドワード 4 世亡き後、幼い甥の摂政となるが、その甥をロンドン塔に幽閉し殺害、自らがリチャード 3 世として王位についた冷血な人間と伝えられる。しかし一方で、この描写は、エリザベス一世 (リチャード 3 世を倒し、ヘンリー 7 世となったヘンリー・チューダーの孫) の下で活動したシェイクスピアの史劇によるところが大きく、実は、兄エドワード 4 世には忠実に仕え、3 年にも満たない短い治世中には国民のための改革を実行するなど、正義感の強い優秀な王だったとの見方も以前からあった。

1485 年、レスター州のボズワースの戦いでヘンリー・チューダーに敗れる。享年 33 歳。

今回の調査の結果、背骨が曲がっていたことと、華奢な体躯だったことが確認された。また、遺骨には致命傷と思われる二カ所の傷以外六カ所の傷が頭蓋骨に、その他にも「屈辱の傷 (humiliation injury)」と思われるものも含め数カ所の傷が認められた。死後数日、晒し者にもされたという。遺骨は、掘られた穴が小さすぎたからか、頭は少し前屈みに、手は縛られた形で残っていた。壮絶な死である。勇敢に戦った姿も想像できる。その死を残忍な男の当然の終焉とみるか悲劇とみるか、今後も議論をよぶのだろう。

歴史は厄介で面白い。事実を並べ積み上げ、様々な状況も考察しながら紐解いていく。だがなかなか一筋縄ではいかない。人がどう考え行動したのか同時代の人間でも確実な事は言えないし、その行動への人々の反応も様々だ。誰がそれを後世に伝えたかでも違ってくる。ある意味、究極の真相解明は不可能とも言える。が、だからこそ、深く探求された説得力のある議論は面白い。歴史から学ぶことも多い。将来の歴史となる今に役立つ、何か目の覚めるような歴史観を聞いてみたい。

(2013年2月19日記 | 毎熊 千代子)